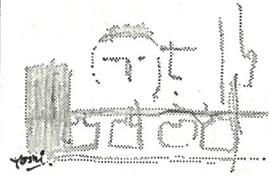


三人の恩師



日下部福太郎

私の特に忘れ難い恩師が三人ある。その一人は小学校の校長先生の一人である。私は今はおとなしいくじなしたが、少年時代はずいぶん腕白であった。まだ学校へ行かぬ頃、近所の友だちと裏の山にあるお稻荷さんの小さなほこらにある粘土製の狐の像を縄で縛って、家を持って帰り、縁に置いて遊んでいた。祖母がそれを見て「もったいない、お稻荷さんの使われしめを持って来るなんて何ということをするのじゃ、早う返してきなさい」ときととして「お許し下さい」と拜んでいた。さっそく返しに行った。村では狐が出ると言伝えられており、恐れていた山である。

小学校四年の頃であったか、学校からの帰途、下級生の一人が、「出べそ」だというの

で、それがどんなものか好奇心でその子を転がして「出べそ」を見たことがある。かわいそうなことをしたものと思う。泣きそうな顔が今でもありありと目に浮かぶ。これは学校にはわからなかつたので叱られなかつたが、ついに校長先生に叱られることを仕出かしてしまつた。やはり四年の頃だろうと思う。雨降りの日に樋から落ちる水が溜まつた水溜りがあつた。それへ女の子の下駄をジャブジャブつけてぬらしてしまつた。女の子が大勢集まつて、先生に言おうといつて、都合よく授業を終られた校長がこられたので、女の子らはさっそく告げた。校長先生は「どれどの子じゃ」と言いながら私のところへやってこられて「お前、何でそんなことをしてやんで、

誰の下駄をぬらしたんじや」といわれた。「おしようちう子なんです」と答えたら「おしよさんといいな、これからそんなことをしたらいかんで」といつて教員室へ帰つて行かれた。大勢の生徒が群がり見ていた。大変くやしかつた。くやし涙をのんで教室の入口に腰をおろしていた。それが知らぬ間にこたえたのか、私の性格が一変して全くおとなしくなり、高等小学校二年の時は校長先生の担当クラスとなつたが、先生は私のおとなしくなつたのに感心して、事あるごとにほめられるようになった。

高等科三年になつて園部小学校に行つた時も、通知簿をもらつた時はいつも寄るようにと窓から帰りを待ち受けて呼ばれたものだ。私が同志社普通学校に入つてから、大晦日に園部に買物に行つて昼食をしている時、先生が外を通られるのを弟が見つけて「福ちゃん、平田先生や」といつたので、飛んで出て御無沙汰を謝し、挨拶をした。先生は「ああ福太郎さん、どうぞ大成を、それでは急ぎますので」といつて大橋を渡つて帰られた。それが最後のお別れだつた。今は園部町摩気の墓に眠つておられる。飛んだ大成をしたものだ、

墓参りを一度でもしたいと思うが、今の身でははずかしくて行けたものでない。私の転向への最初の先生であった。

*

次には同志社普通学校へ入って知った時の教頭波多野先生である。先生のことには教えを受けた多くの者の等しく讃嘆するところであって、今更多言を要しないが、その峻烈にして厳格なる人格は生徒をして恐れをなし、校風はにわか改まった中興の祖と言ふべき先生である。他面暖か味を蔵され、恩恵を蒙むった生徒も多く、処罰されたもののなかにも、後になって先生を讃える程であった。スパルタ教育を謳歌し、軟弱な事が大嫌であった。おとなしい弱々しい私は、反対に先生の持たれる峻烈さに憧れを感じた。忘れ得ぬ教育者である。大学が新設される時、同志社はたんたんとして燃えつつあると嘆かれた事があった。あたかも大阪城没落に際しての片桐巨元の感慨であられたのであろう。今日、現在には通用しないであろうが、明治の硬教育の時代には典型的な教育者であった。最後に私の恩師は、水崎基一先生である。この方は私の普通学校一年の時に専門学校の

教授として東洋汽船会社の要職の椅子を捨てて母校同志社に帰られたと聞いた。同志社大が設立の功労者である事は森中章光氏が書かれたことがあるので、ご存知の方もであろう。

私はその先生にひろわれて中学校の教師になったのである。五年の時には経済を教わり、私は経済は不得意であったが、数学が少してきたので先生が横浜に総合中学校を建てられ、第三年目に幾何を教えるために私を呼ばれたのである。「私で勤まるでしょうか」と言ったら「なに、君ならできるよ安心してやってくれ」に頼まれて、おこがましくも第三年生に幾何を教えるようになった。大正十四年四月、私立東京物理学校の昼間部ができるに当って、私はそれに入學して数学の教師としての資格を取ろうと決心し、先生に許可を得て、午前三時限で授業を終って午後一時からの学習に間に合うように便宜を計ってもらったのである。

私が一本立して生計を立てたのは先生のお蔭である。関東大地震の時は私の不手際から一時休職を命じられたが、翌大正十三年四月からは復職を許され、爾来先生が他界された後も、引き続き在職、敗戦に及んで家を焼か

れ、昭和二十年やむなく母校同志社中学に帰って教師の職を続けさせて貰ったが、戦災に会わなければずっと続けて先生の創立された新子安が丘の学校を去ることはなかったであろう。運命のいたづらか、人力ではどうすることもできない。

今も忘れ得ない三先生!! 老のおセンチかも知れぬが懐かしい次第であると同時に一面面目ない次第である。

古くとも 明治はこいし 明治っ子

*

次に同志社についての感想を書かしてもらうことにする。

まづ第一に創立者新島先生についてである。先日朝日新聞に「栄助日記」が掲載されたが、その中に新島先生の事がたびたび出てくる。まず最初に栄助氏が先生にお目にかかったときの第一印象が書いてあった。実は私も「栄助日記」を読むようになったのはこれからで、ふと新島先生のことを目についたからで、不思議な縁と思う。その時切り抜いておこうと思いつながら、直ちに切らなかつたから、ついに見つからず残念に思っている。そして朝日新聞社京都支局に一枚をくれと頼ん

だがりえらず、まず「栄助日記」を単行本にするよう希望を述べておいたが実現せず、後で聞けば「栄助日記」の原本は森中章光氏の手許にあるようで、栄助氏が森中氏を呼んで書かされたものだと言った。

これは横道に入ったが、今私が書きたいのは、栄助氏が新島先生に始めて会われた時の第一印象の文章である、あれをここに拝借して新島先生についての感想を書きたいのであるが、その文章を引用することができないのはくれぐれも残念である。しかし要するに内容は「先生の風ぼうは、気高かくて気品があり、りんとして犯し難いものがあつた。そして尚温か味があり、頭が上がらぬような感じの中にも慕わしい感じであつた」というようなことであつたと思う。私が新島先生の写真を見て感じていることをずばりと表わされた言葉であつた。

とにかく、新島先生の容貌から見て感じることは、立派な清潔、高尚な方であつたろうと思つのである。したがって田中不二麿氏にを、すすめられた時にも言下に官界入を辞して、最初の信念である教育者として、キリスト教主義による大学を創立することに一路ま

い進されたのはもっともなことであると思ふ。いかに先生の人格をもつてしても官界に入つては、果してその意を通されたことであらうか。俗悪な官界政界に生まれるような先生ではない。ソクラテスの言葉ではないが「汝自身を知れ」ということにあたると思ふ。同志社の最初の卒業生で政界に入り、俗習に染つて収賄し失脚した方があつたが、故安部磯雄先生にしても、キリスト教社会主義を旗印に代議士となり、社会党を組織され、自らその党首となつて、理想を実現しようと思われたのであらうが、安部先生は新島先生の薫陶を受けられた結果、高潔にして俗習に染まらず、党員は一人減り二人減りして、晩年には安部先生一人の党となつたように記憶する。

*

最後にもう一ついいたいのは、住谷総長のよくいわれる「輸血によって救われる」ということである。もっともその官途につくこと通りであるが、これを学校にもつてくるとどういふことになるうか。大体輸血の必要なのは瀕死の病人である、そうすると同志社はまさに瀕死の状態にあつて、住谷先生の輸血によ

つて救われたといわねばならぬ。古くは第二社長片岡健吉氏、大正には大工原銀太郎氏など輸血の人である。同志社は数度瀕死の病氣にかつたといわねばならぬ。願わくは同志社の卒業生の中から、総長なり理事長なり学長なりに成り得る人物の絶えず輩出することである。「裏のむすこ、むすめ」たち等よ、自覚して同志社を背負つて立つ人物となつてくれ給え、実業界や官界があるがち同志社人の進むべき唯一の途ではなからう。同志社に残り、良き教師となり、よき教授となり、総長、学長等になつて輸血の必要のないことを切望する。

「吉野山花咲くころは朝な朝な、心にかかる峰の白雲」新島先生は今もなお、否今こそ一層に同志社を思い煩つておられるであらう。

先生を安静に閑せしめよ、これがわれらの念願である。
(明四五・普卒)